

申請者	学科名	保健福祉学科	職名	講師	氏名	樟本 千里
調査研究課題	エビデンスに基づいた教育指標を生かした保育実践者研究の岡山モデルの構築					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	樟本千里	保健福祉学部・講師	教育心理学	研究の企画・実施・総括	
	分担者	京林由季子 西山幸子	保健福祉学部・准教授 岡山市・たんぼぼ保育園副園長	特別支援教育 保育実践	研究の企画・実施 保育所での実践研究等	
調査研究実績の概要	<p>1 目的 認定こども園法の改正により、幼稚園教諭と保育士保育士の保育者専門性が再考されている。そのような社会の流れの中で、園内研修や園外研修、保育者自身が行う研究は業務内容の一部となっている。今後「保育教諭」が設置されることから、保育の質の向上と保育者専門性の向上が求められることは必須であり、特に、保育所保育士にとって求められることは①教育力の向上、②研修力の向上、③実践者研究の必要性である。しかしながら、①～③は、これまで保育士に必ずしも求められてこなかったことであり、そのための知識や方法論が現場である保育所には乏しい。</p> <p>そこで、「知の拠点」である大学が、保育現場とともに園内外の研修や、保育実践者研究の援助を行い、保育所の研修力・研究力向上のプロセスを実証的に明らかにすることを通し、大学と地域の保育施設の共同的学びのモデルを構築することを本研究の目的とする。</p> <p>2 研究の概要 井原市エリアと岡山市でそれぞれ行った。 <井原市> 井原市では全保育園が今後3年間は「思いやり」をテーマに研究する計画で、そのうちの1園であるきのこ保育園とは研究協力の体制を構築した。0歳児から5歳児までの“異年齢保育”に焦点をあて思いやりの発達について考えることを目的とした。そのため、毎月1回異年齢保育の活動を行い、翌週に担任保育士による内省の会をもった。異年齢保育の活動は、0歳児から5歳児までの子どもがホールに集まり、「ふれあい遊び」を行うところから始まり、その後、年長児と年中児が、0歳児、1歳児、2歳児、3歳児の各保育室、およびホールへちらばり、それぞれの担当保育士のもと異年齢での活動を行う。活動時間は、1時間程度である。活動後、年長児と年中児はそれぞれのクラスに戻り、振り返りの活動を行う。各クラスでどのような活動をし、小さい子の様子や、自分がどう感じたかについてクラスでの共有を行った。</p> <p>保育士は、翌週の内省の会までに、各年齢における思いやりの発達のベースに関連する活動内でのエピソード記録をとり考察する。その内容について、0歳児から5歳児までの担任と研究主任、および大学教員が会し約2時間の内省会を行い、翌月の活動目標を設定することを1年間行った。その結果、各年齢における年間の発達目標が出来上がった。</p> <p>また、年中児と年長児については思いやり尺度における測定を春期と秋期の2回行い、子ども理解の一助とした。加えて、年長児については短期記憶と数的思考について測定を行い、社会性のひとつである思いやりの力と、学習能力との関連について検討を行った。</p> <p>今年度の結果から、来年度は本年度作成した①年間の活動目標を基準に活動計画を練り、②年長児、年中児が参加するクラスを固定化し、③ターゲット児を決めて1年間5人の幼児の発達的变化を追う、ことを予定している。</p>					

地域貢献への
反映を踏まえ
て記述のこと

<p>調査研究実績の概要</p> <p>（地域貢献への反映を踏まえて記述のこと）</p>	<p><岡山市></p> <p>代表者が「子どものコミュニケーション能力を育てる」というテーマで助言者として参加している岡山市の研究会をフィールドとしている。こちらは、既存の研究会であり、16園の保育園がそれぞれ研究委員を出し、同テーマで園を超えて研究を行っていた。当初は助言者として立場であったが、関わりをもち始めてから3年ということもあり、“エビデンスに基づく”というキーワードを入れて、企画から参加することとなった。</p> <p>Berkeley大学で開発された、エビデンスに基づいた教育指標のひとつであるDRDP（2012）を参考に作成した教育指標の一部を用いて、子どもの教育評価を保育者におこなってもらった。本年度は、0歳児から2歳児の乳児クラスで行った。それと並行し、3歳児から5歳児の乳児クラスの指標を日本版に修正している。DRDP（2012）は保育者の観察記録から指標化されたもののため、内容が日本の保育活動の中にはないものが含まれる。保育士の話し合いによって、普段の保育の中でみることができる活動へと修正を行った。子どものコミュニケーション能力と一言でいうが、乳児クラスであってもそこには、認知能力、社会性の能力、言葉の能力と3つに分かれ、保育士からコミュニケーションが低いと評価される子どもであっても、3つの能力の発達には違いがあることが示された。すなわち、援助する際にもその違いに応じた援助を考えねばならないということである。来年度は、①引き続き乳児クラスのデータ収集、②幼児クラスのデータ収集、③子どもの姿に応じた援助内容について検討ができればよいと考えている。</p> <p>3 まとめ</p> <p>本研究では、県内の2市において保育士の実践者研究をサポートする研修の形を構築した。初年度は、大学関係者が積極的に、研究の方向性を示す形を取った方が良いと感じた。保育士は、日々の保育の中で多くの問題点をもっており、子どもたちをどういう方向に育てたいかというイメージももっている。しかし、それをどのように研究の形にし、まとめていくのかということに困難を感じている。大学が積極的に現場研究に参加することで、保育の質の向上と保育者の専門性の向上につながるとおもわれる。最後に、保育士にとって日々の保育活動の傍ら、研究テーマにのっとった記録をとるだけでなく、それをまとめていく時間を業務時間中に捻出することは困難であると感じられた。そこで、保育実践に興味のある大学生が、実践研究に教員とともに入ることで、記録をまとめる役目を担うことは学生の学びにもなり、大学と地域との知の連携が進むのではないかと考える次第である。来年度の目標としたい。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>H28年度 教育心理学会、H29年度 保育学会での報告を予定</p>